

ISSN 2189-4930(冊子版) ISSN 2435-7464 (オンライン)

# JUSER FORUM

Volume 4, No.1(Series No. 9.)

## Contents

|                                      |   |                         |
|--------------------------------------|---|-------------------------|
| <b>Preface</b>                       | <i>Rise and Fall of Sociology of Education in the 1970s</i>               | Shigenobu Mochizuki (1) |
| <b>Records of Mini-Forum No.1</b>    |   |                         |
|                                      | <i>On my book: reflection &amp; prospects</i>                             | Aki Sakuma (3)          |
|                                      | <i>Short Comments on Sakuma's Theses</i>                                  | Takamichi Uesugi (6)    |
|                                      | <i>One day at Forum—Sakuma's Theses</i>                                   | Mari Kunieda (7)        |
| <b>Records of Mini-Forum No.2</b>    |   |                         |
|                                      | <i>On my Book--outlines and issues left</i>                               | Mutsuko Tendo (8)       |
|                                      | <i>One day at Forum—Crises in Education</i>                               | Yuri Nakajima (11)      |
| <b>Obituary for David Waterhouse</b> |   |                         |
|                                      | <i>Remarks</i>  | David Waterhouse(15)    |
|                                      | <i>Obituary : the late Professor Waterhouse</i>                           | Fumiaki Shishida (18)   |
|                                      | <i>Mourning over Professor Waterhouse's Death</i>                         | Nobuyasu Hirasawa (23)  |
| <b>Article</b>                       |   |                         |
|                                      | <i>Human Rights in Educational Practice and Research: a consideration</i> | Ryo Sasaki (26)         |
| <b>Book Review</b>                   |   |                         |
|                                      | <i>CLEVERLAN DS: the secrets behind the world's education superpowers</i> |                         |
|                                      | <i>By Lucy Crehan, 1<sup>st</sup> ed. 2016, paper ed. 2018</i>            | Yoko Yamato (28)        |
|                                      | <i>Abridged Minutes of the Annual Business Meeting of 2018</i>            | (29)                    |
| <b>Abstracts</b>                     |   | (30)                    |
| <b>Postface</b>                      |   | Sumio Morikawa (36)     |

July 2018

JAPAN-UK Society for Educational Research  
Tokyo

日英教育研究会

## ニューズレター

第4 第1号

(通算9号)

2018年7月31日

日英教育研究会

東京

## 目 次

|     |                                       |                       |
|-----|---------------------------------------|-----------------------|
| 巻頭言 | ご挨拶：1970年代の新しい教育社会学の勃興と没落から学ぶ         | 望月 重信 (1)             |
| I   | 研究茶話会の記録：自著を語る                        |                       |
| (1) | 2017年11月                              |                       |
|     | 『アメリカ教師教育史』研究茶話会への御礼                  | 佐久間亜紀 (3)             |
|     | 佐久間さんの仕事                              | 上杉 孝實 (6)             |
|     | 研究茶話会の一日                              | 國枝 マリ (7)             |
| (2) | 2017年12月16日                           |                       |
|     | 『教育の危機』の編集と監訳                         | 天童 睦子 (8)             |
|     | 研究茶話会の一日：教育の危機                        | 中島 ゆり (11)            |
| II  | 追悼 Waterhouse 先生を偲んで                  |                       |
|     | 遺影：旭日中綬賞受賞式                           |                       |
|     | Remarks                               | David Waterhouse (15) |
|     | 翻訳と追悼                                 | 志々田文明 (18)            |
|     | ディヴィッドウォーターハウス先生を悼む                   | 平沢 信康 (23)            |
|     | 補遺                                    | 鈴木 慎一 (25)            |
| III | 会員投稿欄                                 |                       |
|     | 教育実践・教育学研究における人権法の役割                  | 佐々木 亮 (26)            |
| IV  | 教育情報                                  |                       |
|     | 本棚；『日本の15歳はなぜ学力が高いのか：5つの教育大国に学ぶ成功の秘密』 | 大和 洋子 (28)            |
| V   | 記録                                    |                       |
|     | 2018年度定期総会・研究総会記録（抄）                  | (29)                  |
| VI  | Abstracts                             |                       |
|     | 編集後記                                  | 森川 澄男 (36)            |

## 原稿募集

このニューズレター、日英教育誌は会員相互の交流を目的としていますが、会員の方々の投稿、寄稿ばかりでなく、会員外の方々も会員一緒に紙面を用いることができます。身近な方々から適当な方を選び勧誘してください。投稿については下記あてご連絡ください。編集委員会へ取り次ぎます。詳細は編集委員会からご連絡します。

連絡者 森川澄男：morikawa@js4.so-net.n.jp

生田清人：Kio-iku@r9.dion.ne.jp

**Contribution:** We welcome contributions to the Newsletter on education in UK, Japan or elsewhere. Those who are interested may contact first with Mr. Shin'ichi Suzuki.

**Correspondence:** Shin'ichi Suzuki, Dr. Professor Emeritus, Waseda University

E-mail address: saskia933111@lilac.plala.or.jp

Phone: 81-48-664-8612

\*\*\*\*\*

ニューズレター 第4巻 第1号 (通算9号)

発行年月日：2018年7月31日

発行者：望月重信

編集者：森川澄男「ニューズレター」編集委員長

発行所：日英教育研究会 (Japan UK Education Research Forum ;JUKERF)

184-8501 東京都小金井市貫井北町4-1-1

東京学芸大学教育学部 村山拓研究室

印刷所：(株) トライエックス MD コーナー

169-8050 東京都新宿区西早稲田1-6-1、早稲田大学14号館

\*\*\*\*\*

著作権は日英教育研究会に属します

## 巻頭言

### ご挨拶

#### —1970年代の「新しい教育社会学」の勃興と没落から学ぶ

望月重信\*

3年間の議長を務めさせていただきましたが再度3年の議長を務めることになりました。今後ともご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

日英教育研究会は British Studies を追究する過程で歴史・理論・検証・実証及び展望を軸に会員諸賢に対して〈知識・教育学・社会〉(Knowledge, Pedagogy and Society) への多くの鍵となる知の諸相 (a number of key figures) を提起する自由闊達な知の集合体と考えている。英国研究を国際的な視野において考究することは日本、アジア、そして欧米の〈知識・教育学・社会〉の中心と周縁を往還する。そこでは認識論的論争 (the context of the epistemological debate) や比較教育の多くの幅広い分野の中で包括的な洞察が求められる。例えば多様性の軸 (the axis of variation)、学際的な共同研究など (multi disciplinary collaborative research)。つまり研究結果から意味のある解釈を導く (tertium comparationis) ことである。

その認識論的論争への招待としてここでは一つのエピソードを取り上げてみたい。私はかつて M・F・D・ヤング (Michael F.D.Young) と彼の研究室で議論をする機会をもったが自分は教育社会学者ではないと述べたのを記憶している。ただ彼の姿勢は繊細かつ俊英という印象をもっている。1970年代の教育社会学研究者の立場は学界の理論的な焦点を形成するものと指摘される。ヤングは2つの立場を述べる。なおここではヤングの原著 [The Curriculum of the Future—From the ‘new sociology of education’ to a critical theory of learning, FALMER PRESS 1998] とわが研究会と縁の深い故大田直子監訳、「過去のカリキュラム・未来のカリキュラム・学習の批判理論に向けて・東京都立大学出版会、2002」を基にしている (主に原著を中心に私流の解釈を行っていることとお断りしておきたい)。

焦点は主知主義者 (intellectualist) と政治主義者 (politicalist) のスタンスであるが、社会学的な問題に特権を与える主知主義者の立場が勝利したというのである。これが事実ならば今日でも日本教育社会学会で継承されそのスタンスを巡って殆ど論争の対象になっていない。そこでなぜ政治主義的ではなく主知主義的な立場を取り入れたかという疑問がある。それは主知主義が社会学的な問題に特権を与えているからであり知的探究が規範的、記述であるからであり、教育を無前提に「善きもの」とし、「子ども中心主義」を標榜するからである。急いで記せば大学に教育学研究科が設置されるのは大学人のそうしたエートスに拠る。これは後述される大学における教師教育の否定媒介的理念と深い関係がある。

1970年代の初め教育社会学界をリードするフランク・マスグローブ (FRANK MUSGROVE) は「イギリスの教育の権力と権威の型」(PATTERNS OF POWER AND

\* 明治学院大学名誉教授

AUTHORITY IN ENGLISH EDUCATION : Methuen 1971) で教育の官僚化と教師と学術の行政者との間の葛藤を指摘した。教育目標を達成するために教育機関でいかに権力が動因されるかを探る。これに関連して1960年代後半から教育社会学が自ら政府の政策レトリックや妥協を暴露する、政府の政策として平等を達成することに専念する傍ら教育が分断と不平等を促進している現実を批判する研究を進める。この注目の対象に社会における権力の分配と知識、カリキュラムを措定したが、その背景構造として政治的、文化的ラディカリズムがあったことは否めない。教育社会学が教育学上の論点に止まらず社会批判と連動したカリキュラム批判を確立する方法を提供したかのように若い社会学徒に確信(錯覚)された。これが「新しい教育社会学」(NSOE)の原点となった。「学術的カリキュラム」の所与の中に公平で民主主義的なカリキュラムの基本があり、いわば大衆的な感覚や常識でもあるという自負があった。この自負という「言い換え」がどうしてなされたのか。1970年代多くの大学に基礎を置く教育学研究の構築に大学人の多くは学問の自由とその高潔さを重要な指標とした。教育社会学も政策の実行に参加することに抵抗を示した。大学の教育学研究は批判で十分であり政策の立案やその実行は研究と分析とは異なるとする「見識」があった。ヤングはこう述べる。「研究は実践を改革することに貢献するかどうかということにのみ意味を持つ」と。1970年代日本の若手研究者たちは(私を含めて)教育学研究に反権力を嗅いだように思えた。しかし学術的な研究によって提起された問題の実践性を取り上げることは自分たち以外の責任であるという判断が働いたのである。これは新しい教育社会学がわが国で流行になりやがて消滅していった理由と無関係ではない。思えば1980年代の教訓でもあるフランクフルト学派の批判理論を十分に学ばなかった。つまり「大衆的な感覚は民主主義的なカリキュラムの基礎とはなりえない」と。

最後にイギリス教師教育改革に少し触れたい。ヤングによれば1980年代は「進化論的現代化」(Evolutional Modernization)から「技術専門的現代化」(Technocratic Modernization)への移行期とみているのは興味深い。イギリス都市部学校のドロップアウト、到達度の低い成績問題を解決することが改革の大きな仕事であった。教師教育カリキュラムでは教育関連の学問(哲学・心理学など)によって支配されていた。専門的教師が自分の役割を理解可能にする「概念枠組み」を提供する学問(ITS FOUNDATION DISCIPLINES)を信奉することは想像できる。しかし1980年代、例えば教育実習生が実践に有効な学問の諸理念を自分たちの実践に適切かつ効果的なものにする教育学的な解決を社会学に求めた。

やがてイギリスでは教師教育の技術専門的現代化が新自由主義的なプロジェクトの一部を構成することになる。現在、技術専門的現代化のアプローチが自ら解決できそうもない問題を創り出していることに気づき始めた。いわば第3の現代化—再帰的現代化(Reflexive Modernization)の躍動である。学習観、知識と学力、学校と大学の関係が問われている。そこに「専門職モデル」か「制度的モデル」かの二者択一の選択が迫っている。

拙著『アメリカ教師教育史』研究茶話会への御礼

佐久間亜紀\*

昨年（2017年）11月に、研究茶話会にて、拙著『アメリカ教師教育史』（東京大学出版会、2017年）を取り上げていただき、本当に有り難うございました。

2月末に刊行されたものの、多忙を極める昨今の大学の現場で、この分厚く高価な本を手にとって下さる方がいるのかと、とても心許なく感じておりました。そこへ、鈴木慎一先生がいち早く、検討会の機会を設けましょうとお声がけくださったのです。

鈴木慎一先生との出会いは、私が早稲田大学教育学部教育学科に入学した18歳の時でした。以来30年以上もご指導いただいている鈴木先生から、このような機会を与えて頂けて、素晴らしい恩師を持つことの幸せを、あらためて思った次第です。

当日は、私から本書の要旨を発表させていただきました。出版後初めて、読者から直接反響を聞く機会でしたので、とても緊張していました。ですが、多くの先生方から、途切れなく感想や質問、関連するご指摘などを頂き、とても勉強になりましたし、心から有り難く感謝の気持ちで一杯になりました。

例えば、大学院生の頃からお世話になっていた先輩の江間史明さん（山形大学）からは、終了後に直接「面白かったよ」「佐久間さんの問題意識が全章を貫いていることが伝わってきた」と、直接お声をかけて頂きました。「面白かった」—— 私にとっては、この言葉は、シンプルですが論文への最高の賛辞のように感じられる言葉で、何より嬉しい言葉かけでした。

特に印象に残ったのは、「あとがき」への反響でした。茶話会の冒頭で鈴木先生も触れてくださいましたし、その他にも複数の方が「とにかく、最初にあとがきだけ読んで感動した」とおっしゃってくださいました。今回このニューズレターには、「研究テーマ設定の趣旨と、研究経過や成果をまとめてほしい」とご依頼を頂いたのですが、まさにそれはこの「あとがき」に書いたことでしたので、以下、抜粋させていただきます。

\* \* \*

私が本書の核となるハイドとキングの史料をみつけたのは、日本学術振興会特別研究員としてアメリカ留学中だった1999年にまで遡る。

当時の私の身体には、一つの衝撃が宿ったままだった。二十代半ばで結婚し、念願の特別研究員に採用されたとき、ようやく経済的基盤ができたと思い「妊娠したらどうしたらよいですか」と事務局に電話で問い合わせた。すると電話口の女性が、「産休制度はありませんので、その場合は辞めて頂きます。研究費も返納していただきます」と即答した。二の句がつけなかった。絶句するとはこういうことか、と思いながら、立ちすくんだのを今

\* 慶応義塾大学教職課程センター教授

も覚えている。男性はそのまま親になれるのに、女性だけが資格を剥奪されるのか。このときの衝撃が、私に教師教育史の先行研究に対する違和感を与え、ジェンダーの視点から史料を読むように導いたように思える。

産むなというメッセージを全身に突きつけられたまま数年を過ごし、帰国してやっとの思いで大学に初職を得たとき、今度は逆に「まだ子どもがいないのか」「子どものいないあなたに、教育の何がわかる」と問われた。しかも、当時は関口礼子先生が国立大学教員の通称使用を求める裁判を起こして係争中で、佐久間亜紀という名前で研究活動を継続すること自体も、制度的に否定されていた。いったいどうしろというのか。言いようのない思いが身体を引き裂いた。教員養成系の大学に勤務し、幼稚園や学校を多く訪問する女性教育研究者には特に、自分が結婚しているかどうか、子どもがいるかどうか、仕事の内容や能力よりもまず先に問われるのだった。ピーチャーの苦悩は、私の苦悩だった。

ようやく子どもを授かり、産休育休を経て復帰したとき、今度は「競争的研究費配分額0円」の通知を受け取った。前年度の研究実績に応じて研究費が配分される仕組みのため、前年度不在の私は研究実績ゼロ、と算定されていた。産んだら産んだで、ペナルティを課されたようだった。女性大学教員の出産が想定されていない制度を改善するために、保育園へのお迎えの時間が迫るなか、学内を奔走しなければならなかった。そもそも国立大学の独立行政法人化、教員免許更新制度の導入、教員養成六年化やインターンシップ制度導入など、学内外のさまざまな改革への対応に追われていたので、研究時間や心身のエネルギーの消耗は激しかった。

困難の連続のなか、それでもなお筆を折れなかったのは、史料のなかで出会う女性たちの声が、あまりにも生々しく私に迫ったからである。深夜に一人、疲れ切った身体で、彼女たちの手書きのスペルを一字ずつ解読しながら、何度も魂を揺さぶられる経験をした。「これほどの努力を重ねているのに、なぜ社会は一方的に教師や師範学校を非難するのか」、「なぜ次から次へと改革に追われなくてはならないのか」・・・二百年前のアメリカの女性たちの声を蘇らせる作業は、同時に私自身を蘇らせる作業となった。いま私は、二百年前を生きた異国の女性教師たちと、時空を超えた連帯を生きている。

この連帯は、私と同じような経験を生きてきた先達との連帯でもあった。突如として不可解で理不尽な局面に出会い、思わず立ちすくんだとき、フェミニズムと女性学にどれほど救われ勇気づけられてきたことか。学問は人を救う。学問は人を生きさせる。女性学はこのことを私に教えてくれた。

特別研究員の産休取得、通称使用の実現や使用範囲の拡大、競争的研究資金の配分制度の改善など、その時々職場で、私なりに後の世代のために微力をつくしてきたが、本書の出版という研究活動を通して、これからの社会の改善に少しでも寄与できればと願わずにいられない。(後略、引用ここまで)

\* \* \*

実は、このあとがきについては、草稿の段階で担当編集者の方とちょっとしたやりとり

が生じました。せっかく本論では学術的な議論が展開されているのに、あとがきでこのような内容が出てくるのはいかがか、というご意見でした。私としても、女性の読者には当たり前すぎることであろうし（個人的にもっと大変だったことも沢山あったけれど公表などできるはずもなく）、男性の読者にはかえって反感を買いせっかくの本文への評価を落とすはしまいかと、書きぶりのさじ加減に不安をもっていました。

ですが、最終的には編集者の方から、「終章を改善して、あとがきとの段差をもう少しならかにすればよいのではないか」とアドバイスをいただき、終章の最後尾を直して、あとがきは草稿のまま出版することになりました。

あとがきでさえ迷いを含んだ本書でしたが、「女性研究者がどれほど大変な思いをしているのか初めて知った」などと伝えてくださる方もいて、逆に私のほうが驚きました。本書に登場する7名の主人公のジレンマが、私を含め、現代の女性にも共通するものであることが、読者に伝わったのなら、書いてよかったと思います。

もう一つ頂戴した本稿ご依頼のテーマ、本書の研究成果についても、あとがきに下記のようにまとめました。

「本書でみてきたアメリカの歴史、すなわち州政府が、教職の魅力を増したり社会的待遇を改善したりする努力をなおざりにしたまま、教員養成機関にカリキュラム改革を迫るだけの政策を、約百年間続けた結果、高度化して教員養成をおこなわなくなった大学と、小学校教員養成に特化して大学化できないほどレベルが低い師範学校とに二分化させてしまったという歴史を踏まえれば、21世紀の日本で現在進行している教員養成改革は、まさにアメリカの轍を踏もうとしているようにみえる。

学校教員の質の低さを、すべて教員養成機関のカリキュラムのせいにしてしまう政策理念。財政出動の代わりに、安価な労働力を調達することで、教員数だけ揃えようとする財政構造。教職を安価な労働に据え置いたまま、教員個人の献身や熱意を動員し、結果として教員の自己犠牲を強いる社会規範。政治家が汚職を重ねても、経済が不況に陥っても、政治学部や経済学部を廃止せよという世論は起きないのに、学校教育に問題が生じると教員養成機関を潰そうとする、世論の「唾然とさせられる」までの「無知と偏見」（第九章のハイドの言葉）。19世紀のアメリカでおこなわれた改革が、21世紀の日本で、いままさに繰り返されようとしているように思われてならないのである。」

本書の本文は、あくまでアメリカを対象にした研究で、直接日米比較はおこなっていませんが、研究の背景にはもちろん、日本の教育改革に寄与したいという現代的な関心があります。折しも日本では、2016年には教育職員免許法が改正されましたが、この改革は10章でとりあげたミシガン州立イプシランティ師範学校で失敗した改革の事例に酷似しています。

つまり、「専門的」教員養成カリキュラムの内実をどうみるか、換言すれば、教職教育の

土台としての「教養教育」の内実をどのようなものとして構想するかが、日米に共通して、重要な論点となっています。10章で取り上げたジュリア・キングと、州立師範学校の歴代校長とがどのような経験をくぐってきたかは、日本にも参考になることと思います。

以上のように、本書は、さまざまな角度から、さまざまな読み方をして頂けたらと希望しています。本筋としては、序章で、教師教育史研究、教職／専門職史研究、女性史研究の、三領域の接点として本書を位置づけています。ですが、そもそも、教師教育の歴史とは、教師教育機関の制度史であるだけでなく、教育思想やカリキュラム、教育方法の歴史、さらには子どもの学習と教師の学習の関係史でもあります。専門職化を試みてきた教職の歴史としてとらえれば、専門職史の一領域としての意味ももっています。さらに上述したように、大学教育のなかに、教養教育と職業教育をどのように位置づけるかの苦闘の歴史としても、お読みいただければ幸いです。

今回は、貴重な機会を与えていただき、本当に有り難うございました。ご高覧くださいましたら、ぜひとも著者までご感想やご批判をお寄せいただければ幸いです。

## 佐久間さんの仕事

上杉孝實\*

佐久間さんのご論稿は、ジェンダーの視点から分析された非常に興味深いものでした。日本と比較しても、アメリカでは学校教師を女性と重ねて見る傾向が強いのですが、学校のモデルが子ども集団の監護に見出だされて、寺子屋にモデルを求めるのとは異なったところがあったことも関係しているかと思われます。日本の場合、第二次世界大戦が終わるまで、女子師範と男子師範に分かれていたことも、ジェンダーの偏りを意識させないことにつながっていたと言えそうです。アメリカの師範学校教育が教職の専門職化を指向することで、一方で女性の地位向上に資する面がありながら、他方で教職の女性化を支え、大学化とも相まって既成の専門職をモデルにすることで女性の排除の側面も持つことなど、教育におけるジェンダー問題を考えるうえで、貴重なご研究と存じます。確かに、教職そのものの社会的位置づけが、大きく関係していることであり、日本の師範学校でも給費制度によって学生の確保ができていました。別の観点から見れば、狭く深い知識を重視し、素人との距離を置く既成専門職の限界が指摘されるようになってきている今日、それとは異なった専門職としての教職の意味が追求されねばならず、従来男性本位の職業観の転換をももたらすことと関連する問題と思われる。日本の教職のジェンダー問題の実証的研究としては、河上婦志子さんの『20世紀の女性教師』（御茶の水書房）が詳しいものですが、教師養成より教職の実態に焦点が当たっています。多少とも日米の教師教育の比較研究に関わった者として、大きな示唆を得たことをありがたく思っています。

\*京都大学名誉教授



## 研究茶話会の日

國枝マリ\*

鈴木愼一先生からのお誘いを受け、日英教育研究会の研究茶話会（11月11日）に参加させていただき、興味深い一日を過ごした。当日は佐久間亜紀さんが、19世紀アメリカ教師教育、ことに教職が女性に開かれたものとなる経緯、そしてその専門職化の道筋を分析、発表された。

教師になること、そして教師であることの模索は旧くて新しい課題である。19世紀というのは欧米諸国において初等教育の制度化が進んだ時期であり、アメリカの経験もそこに位置づけられる。発表をうかがいながら、これをジェンダーの視点から考えてみた。

発表では19世紀初期のウィラード、ピーチャー、ライアン、中期のウォルトン、後期のジョンソン、ハイド、キングに注視し、その類型化と展開を示された。時期としては重複しており、同時代に様々な教師像が混在しているが、いずれも現代につながる教師の原型を示している。

ジェンダーの視点からこれを見ると、この時期の教師としての実践の積み重ねが、①女性たちが経済的に自立する道の開拓に寄与したことは明らかである。②女子教育は多くの国で後回しにされていたが、女子にも初等教育を受けたい・受けさせたいというニーズにとどまらず、中等教育・中等後教育を求める人々の希望をかなえた。それにより③学問的専門性を追求することを可能にした。また師範学校の共学化がすすむことにより④女子にとってはより広域に師範教育を受ける場が広がり、それが公的機関として位置づけられることにより⑤師範学校が教育機関のひとつとして社会的に認識されるようになったことも確認できる。一方、これは一般大学よりも師範学校（教育系大学）の評価が相対的に低くとどまるといふ残念な結果をもたらしたのも事実だが、⑥わずかではあるが女性にとっては学問的にも経済的にも上昇のチャンスとなったのである。

このような教師教育の積み重ねが、例えば日本にどのような影響を与えたかについては、単純にこれを結びつけることは難しい。

欧米においては、国によって異なった歴史的文化的ニーズのもとではあるが、初等教育が制度化された時期はおおむね19世紀といわれる。R.P.ドーア（R. P. Dore）は『学歴社会 新しい文明病』（*The Diploma Disease*, 1976）のなかで、これら諸国を「先発」と呼び、それを追いかけるように近代化に向けて進んだ諸国を「後発」と呼んだ。「後発」諸国はそれぞれの歴史的文化的背景をもとに近代教育にギヤを切り替えたものであり、日本も明治維新を機に、欧米に倣い近代教育制度を設計したことは知られている。それまでの身分・性別により分離された教育から脱却し、近代国家建設のための人材育成を目指して試行錯誤しながら教育制度を構築し、同時にそれを支えるための師範学校の整備に努めた。当時の義務教育は初等教育のみであったため、師範学校の目的は初等教育の教師育成にとどまった。そうは言うものの、女子教育に限って言えば、初等教育の普及とその上につな

\*津田塾大学名誉教授

がる中等教育レベルの師範教育が制度化され、職業としての教師像が具体化された。こうして女性の経済的自立が見える化することに貢献した。

しかし、初等教育の教師育成にとどまらない、より高い専門性を追求する道は険しかった。第2次世界大戦以前の日本では、女子がより高い専門性を全うする場としては、文部省によって東京と奈良に設立された女子高等師範学校（現・お茶の水女子大学、奈良女子大学）と少数の私立学校（専門学校）に限られていた。くしくも20世紀に入るところに、吉岡弥生による「東京女医学校」（現・東京女子医科大学）、津田梅子による「女子英学塾」（現・津田塾大学）、成瀬仁蔵による「日本女子大学校」（現・日本女子大学）等が創設され、専門性の高い女子教育の機会を提供するようになった。数は限られているが専門的知識をもって中等教育段階の学校で教職に就く資質と能力を備えた女性教師を輩出する役割も担ったのである。

単純に論ずることはできないが、その歴史的背景をもとに、先発諸国の一つであるアメリカではぐくまれた教職の在り方がモデルの一つとして日本に影響を与えたのは否めない。明治初期には文部省顧問・学監としてラトガース・カレッジ教授のモルレー（D. Murray）がアメリカから招へいされた。モルレーは欧米の教育を短絡的に取り入れることを避け、むしろ日本の文化的諸条件に即した教育制度の確立を目指したが、彼の助言を得て制度化された近代教育に、19世紀のアメリカにおける教師教育の経験の蓄積が反映されることは、まさに近代化後発の日本がたどった道筋と考えられる。

佐久間さんの研究茶話会でのご発表をうかがいながら、19世紀のアメリカで多くの女性たちが教職の理想を体現しようとした姿をあらためて尊敬をもって見つめなおす貴重な一日となったことに感謝する。

## 研究茶話会の記録「自著を語る」2（2017年12月16日）

### 『教育の危機』の編纂と監訳という学問的ワーク

『教育の危機—現代の教育問題をグローバルに問い直す』天童睦子監訳

2017年 東洋館出版社

天童 睦子\*

#### 1. 『教育の危機』の編纂と監訳—知識をグローバルに問うために

教育の危機というとき、そこにはいくつかの局面がある。教育そのものの危機、高等教育の危機、教師の危機、子どもの危機、そういった教育問題には、教育を取り巻く政治経済的・社会的・文化的危機が表出することが少なくない。

『教育の危機—現代の教育問題をグローバルに問い直す』（原著 *Crisis in Education* :

\*宮城学院女子大学 教授

*Modern Trends and Issues*, 2014) 編纂の契機は、2012年に台湾の国立台南大学で開かれた教育社会学分野の国際会議に遡る。前年の2011年3月、東日本大震災で私の故郷、宮城は甚大な被害を受けた。身内が直接の被害にあったにもかかわらず、なにもできない無力感に囚われ、いったい学問は役に立つのかと、私自身の立ち位置も見失いかけていた。そのような時期に、海外（台湾）での報告の機会を得て、研究への思いを新たにした。当時、台湾教育社会学会会長であったジアン Tien-Hui Chiang 先生を紹介してくれたのは、石戸教嗣先生（埼玉大学）であった。

ジアン先生とは、教育社会学の国際化や理論的展開の重要性の議論で意気投合、欧米にも広い人脈を持つジアン先生は、ギリシャのペラ・カロギアナキス女史と企画を進めており、その編者に天童も加わることになった。世界的な教育社会学、比較教育の研究者を中心に、現代の教育の危機を多面的に論じるとの主旨にたち、瞬間に執筆陣の案が出そろった。

全16章で構成される本書は、二部構成で、前半はグローバル化にかかわる教育問題を広く論じる章が中心である。後半は欧州、北米、アフリカ、東アジアといった地域の、新たな教育問題が具体的事例とともに取り上げられている。

5名の編者、カロギアナキスとカラス（ギリシャ）、ジアン（台湾）、ウォルフター（南アフリカ）、天童（日本）のほか、世界的に著名な教育社会学、比較教育学の研究者が名を連ね（アップル、カザミアス、ミッター、カウェン、サカロプロス、ポプケヴィッツほか）、またギリシャ、東アフリカ、中国といった国々の教育問題の内実に迫る力作が揃った。

日本からは、教育社会学分野でいままで世界的にあまり紹介されていない領域を取り上げ、教育の危機の論議に一石を投じようと思い立ち、ニューカマーの子どもの教育問題に詳しい小内透先生（北海道大学）に執筆を依頼し、天童はバジル・バーンステインの権力・統制理論をふまえて、日本の少子化と育児戦略を論じることにした。

本書の結論をまとめると、地域の違いを超えて、一見多様な教育問題の背後に共通して浮かび上がるのは、グローバル化の波、新自由主義下の教育の困難、教育への政治的経済的影響の大きさである。そして、本書の意図は、現代の教育の危機を乗り越える手立てとして、教育社会学、批判的教育学、比較教育学といった学問から何が提起できるかを、グローバルに議論するアリーナを提示することにあった。

## 2. 批判的教育学になにができるか

日英教育研究会の研究茶話会（2017年12月）で発表の機会をいただき、本書の監訳者として、教育社会学者マイケル W.アップルの第1章「教育の危機：批判的研究と実践の課題」を中心に取上げた。アップルは「正直に言おう。今、教育は非常に困難な時を迎えている」（Apple 訳書 2017, p.11）という。グローバル化、新自由主義の加速、教育の市場化、それらに抗う批判的教育学の視点は、本書の他のいくつかの章でも共有されている。

アップルは、本書全体にかかわる根本的問題を提起している。すなわち「いかなる知識

を価値があるとみなすのか」、またそれは「誰の知識か」という問いである。彼は、保守的近代化 conservative modernization という鍵概念を用いて、支配的集団による「危機の語り」 crisis talk、すなわち「教育の危機」言説とそれに基づく政策の本質を、教育と権力の視点で論じている。支配的集団は、積極的に広く社会と教育のプロセスに関与し、どのような学校が良い学校で、なにが良い知識か、なにが良い教え方で、良い学習とみなされるのかを根本的に変化させている (Apple 訳書 2017, p.13)。アップルが、保守的近代化の主要な4つの支配的集団として挙げるものは、①新自由主義的市場化重視の集団、すなわち経済資本と文化資本をもつ集団で、教育問題の対処を新自由主義的な市場化された解決に委ねる立場、②新保守主義的集団、③権威主義的ポピュリスト・宗教保守派、そして、④監視文化 audit culture に関心を寄せる専門的・管理的な新中間層の人びとである。

批判的教育学の視点からは、新自由主義と保守的政策が、学校教育、教育行政、すべての教師と学校関係者に多大な影響を及ぼし、数々の予算削減、職務切り捨て、あらゆる段階で教育者の自律性が損なわれ、教員組織への攻撃がはっきりと見えてくる。

教育に企業の競争原理を持ち込み、測定評価、説明責任が教育現場に持ち込まれ、教育者の専門性への敬意を喪失させるほどの管理的業務重視の動向は、国の枠を超えて多くの地域でみられる国際的傾向である。

では、保守的近代化の影響の増大を前に、批判的教育者が果たすべき責任とはなにか。社会学者マイケル・ブラヴォイの示唆をふまえてアップルは、我々自身を「持たざる者の視点から世界を見る」ことに再び位置付けることが重要とする。さらに、学界と呼ばれる社会的場においては、独自の序列と専門分野の技法を用いて、アカデミックな資格の追求、官僚的で制度的な順位付け、終身在職制といったキャリア圧力があり、これらすべてを確かなものにするのが正しいことと考えて行動している。しかし、我々を突き動かす根本的衝動は、決して完全に征服されるものではない。批判的社会学、批判的教育学に立つ活動は、「見える、厚みのある、行動的な、ローカルな、しばしば対抗公共的なものと密接にかかわり・・・、労働運動、地域連携、信頼の共同体 community of faith」といったものとともにあることを心に留め置こう (Apple 訳書 2017, pp.28-31)。

本書ではほとんど触れられていないが、批判的教育学の視点は、フェミニスト教育学 feminist pedagogy と親和性が高い。すでに1980年代から、女性学プログラムなどフェミニスト教育学の批判的実践がある(たとえば E. Ellsworth, b. hooks など)。昨今アクティブ・ラーニングの「流行」があるが、批判的教育学やフェミニスト教育学から見れば、「アクティブな学び」 active learning は本来、社会構造・変革的 transformative な学びを含んでいる。フェミニスト教育学の現代的意義についてはいずれ稿を改めて論じたい。

### 3. ほかに選択肢はないのか—大学改革と TINA

本書は、大学改革の論議にかかわる人々にとって不可欠な、高等教育の責務としての教養教育の創出を振り返る契機を提示する。比較教育学の A.カザミアスは「人文主義的パイ

ディアとソクラテス的な批判的教育学の再発見」を論じている。カザミアスによればパイディア *paideia* とは、知性、道徳、市民的などを含む全人教育の包括的概念である。彼は現代の大学教育が、パイディアの場から「生産プロセス」のための教育へと変容し、狭い道具主義的教育偏重に陥っていることに警鐘を鳴らす。

R.カウエンの「大学と TINA」は、転換期の大学教育を世界的視野で論じた興味深い論稿である。TINA は、“there is no alternative”「ほかに選択肢はない」の略である。80年代末以降の、レーガン、サッチャーらによる「新自由主義的」国家路線のなかで転換を余儀なくされた大学教育の状況をふまえながら、カウエンは、市場型大学への転換や教育の官僚化の進行に疑問を呈しつつ、はたして本当に「ほかに選択肢はないのか？」と問いかける。

本書の原著(英語)は2014年に出版され、その後、ギリシャ語、中国語訳が出版された。日本語版の訳出を進めていた2016年前後、英国では欧州連合 EU からの離脱の是非を問う国民投票が行われ、欧米ではグローバル化の恩恵を受けていないと感じる人びとの不満が高まった。非寛容、軋轢、分断、排他主義といった政治・社会状況のなか、本書で先駆的に述べられた集合的帰属、自己と他者の境界、「恐れの新たな空間」(T. Popkewitz ほか)といったテーマは、目前の現実問題として浮上しており、「いま、教育になにができるか」が我々の課題として問われているのである。

#### 【文献】

Calogiannakis, P., Karras, K. G., Wolhuter, C., Chiang, T-H., M. Tendo eds. 2014, *Crisis in Education: Modern Trends and Issues*, Nicosia, Cyprus: HM Studies and Publishing. (=天童睦子監訳, 2017, **教育の危機—現代の教育問題をグローバルに問い直す**』東洋館出版社.)

本稿は、『教育の危機』「あとがき」(天童睦子)、および2017年12月日英教育研究会、研究茶話会(於:早稲田大学)での報告をふまえたものである。同研究会では他に翻訳メンバーの石黒万里子さん(第6章訳)、日暮トモ子さん(第8章訳)が報告し、大野順子さん、中島ゆりさんも参加した。貴重なコメントをくださった参加者の皆様に御礼申し上げます。

### 研究茶話会の一 —教育の危機—

中島ゆり\*

2017年12月16日に早稲田大学で開かれた研究茶話会にて翻訳書『教育の危機—現代の教育問題をグローバルに問い直す』(P. カロギアナキスほか編、2014=2017、東洋館出版社)の合評会が行われた。茶話会では、まず、編著者であり日本語版の監訳者でもある天童睦子氏が本書全体の概要を紹介し、さらに氏が翻訳したマイケル・W・アップルの章「教育の危機、批判的研究と実践の課題」を具体的に取り上げられた。つづいて、翻訳者の一人で

\*長崎大学 教員

ある石黒万里子氏がご自身が翻訳を担当された R. カウエンの「大学と TINA—他に選択肢はないのか?」、日暮トモ子氏が J. スンの「危機と対応：人間と共生の教育」について報告された。著者は本書の翻訳に参加したのをきっかけに研究茶話会に初めて出席する機会をいただき、T. ポプケヴィッツ & C. S. マルティンスの「集合的帰属、記憶、恐れの間—自己と「他者」を作り出すこと」について少しだけ報告させていただいた。

話は相互に関連し、大学の市場化、平準化、官僚制化、自然から分離された形で教えられる知識を憂い、これに対抗していく、あるいは他の選択肢を探していくことが課題とされた。アップルはフレイレの批判的教育学とグラムシの対抗ヘゲモニー的教育から、カウエンは「転型論 *transitology*」から、スンは自然と人間の共生教育から、現在の「教育の危機」を乗り越えることを検討している。

この本と茶話会での議論を通じて考えさせられたのは、「教育の危機」に対峙するために私たちは何をすればいいのかということである。日本の大学もグローバル化の名の下に市場化、平準化、官僚制化が進められており、大学に勤める者は誰もがそれにすでに巻き込まれている。改革とは、たとえ将来的に失敗に終わってしまうとしても素晴らしい未来を想像してなされるもののはずだが、少なくとも日本の場合、長期的な未来は妄想すらされることなく、年刻みの思いつきの課題を、疑わしいという思いを表に出さないようにしながら、黙って—内々に文句を言い続ける人もいるが、いずれにせよ—真摯に片付け続けるという喜劇的な悲劇を毎年、皆で演じ続けている。私たちは、このような悲劇を演じ続けることに対して内に充満させている黒い思いをそろそろ表に出していかないといけないのではないか。

いっそのこと大学を辞めてしまうという手段はこの劇を演じ続けなくて済む素晴らしく有効な方法ではあるが、それでは大学の外に輝かしい未来があるかということ、それもまた疑わしい。アップルは今後の課題の1つとして「研究者／実践家がもつ特権 *privilege* を用いることの意味」を挙げ、「我々一人一人が、大学などの場で自分の特権を用いて、そこにいない人々のためにその空間を開いていく必要がある」と述べている。たしかに日本においても大学が多様な意見、多様な人びとを拒否するということは（今のところは、まだ）ない。「特権」を利用して何かできるかもしれない。何となく黙って演じ続けなくてはいけないと思ってきたのはもしかしたら気のせいで、少し台詞を変えてみたり、別の歌を歌ってみたりすることで結末が変わるかもしれないと想像し、それを実際に試してみることも必要なのだ。

初めてお会いする方々が半数であったが、茶話会のあとは懇親会にも参加させていただいた。高田馬場で美味しいロシア料理とワインをいただきながら、とても楽しい時間であった。中国から清華大学の鍾周氏も参加されており、所属も世代も国も超えたこのようなつながりは、どうか対抗できないものかと地方で一人試みる中、仲間がいるのだと勇気を持たせてくれた。

I wish to acknowledge the support of the Department of East Asian Studies at the University of Toronto, where I taught for 40 years; and I have prevailed on Prof. André Schmid, the current Chairman, to say a few words on behalf of the Department. I have sometimes said unkind things about the University of Toronto (except for its dental insurance plan!); but the Department of East Asian Studies allowed me the freedom to teach and conduct research on whatever I wanted, so long as it pertained to East Asia. I think that my colleagues in the Department were only half aware of what I was doing; but they let me pursue my inclinations, and spared me from heavy administrative duties.

When I joined the fledgling Department in 1966 it occupied part of a bleak corridor in Sidney Smith Hall. I had a small windowless office, and our Japanese library was tiny. In my first year I taught just one graduate course, on Japanese painting, for which I had two students. After several moves to larger quarters, the Department was eventually settled in the Robarts Library building, whose 14th floor was not designed to be office space. Bill Saywell, Chairman at the time, arranged for me to transfer to more congenial quarters at University College: which thenceforward became my main base, and where I still have a desk. Over the years the Department of East Asian Studies has grown out of all recognition; and it has resisted attempts by short-sighted Deans to merge it with other Departments, while remaining an area Department with the teaching of languages and literature at its core. I myself taught classical Japanese language for many years, along with a wide range of courses on visual and performing arts, from India to Japan. I always had my biggest audiences for lecture courses on art; but my own two favourite classes, both at 3rd-year undergraduate level, were for Classical Japanese, and for an unconventional half-course which I called "Judo in Japanese Culture". Classical Japanese is a dead language; and I modelled my course on the way I was taught Latin and Greek as a schoolboy in England. Students here are unused to this approach, and found it difficult at first; but I continue to believe in its validity. However, my early curiosity about Japan was partly sparked by judo; and the judo course, inspired by one at the University of Chicago, on *aikido*, gave pleasure and intellectual stimulation to both students and myself. It included practical instruction in judo, as well as lectures, and I offered it for 12 years. For safety reasons I limited it to 40 participants, but 200 would apply, from across the university. I selected as many female as male students and, in the spirit of judo, deliberately made it as international as possible. I published an article about the course, and it was even featured in a CBC radio broadcast (with the sound of many breakfalls). At the end of the year we would have a pot-luck party at my house in Oakville, with international dishes prepared by the students and by Naoko herself. Anthony Lee, today an oriental art consultant, was at the time sous-chef in a prominent Toronto restaurant, and arrived with professional kitchen knives. Another student from the course, Mr. Yukio Koglin, is here today. Yukio-san was already a very experienced judoka, and acted as my teaching assistant for several years. A 4th *dan* in judo, he is now a professional judo teacher in

Toronto. I am happy that two of my own Canadian judo teachers are also with us: Mr. Mitchell Kawasaki (7th *dan*) and Mr. Duncan Vignale (8th *dan*).

Former students of mine are scattered throughout the world: in Australia, Japan, Korea, Taiwan, Hong Kong, the Philippines and the United States. Obviously most could not be present; but I am delighted that two of my former doctoral students have come from south of the border. Dr. Catherine Pagani has taught at the University of Alabama for many years, and holds a senior administrative position there. Her doctoral thesis, since published as a book, was on clocks and automata in late imperial China; and grew out of our shared interest in the history of these subjects in China and Japan. Dr. Allen Hockley, one of two former doctoral students of mine who have obtained teaching positions at Dartmouth College, wrote on the 18th-century woodcut print artist Isoda Koryū, a pupil of Harunobu, in a path-breaking thesis which has been published as a book. Allen has also published on Japanese photography; and is currently Chairman of the Department of Art History at Dartmouth. Over the years I have found much to admire and sometimes to criticise in Japanese culture: from judo to classical literature; Buddhist thought and iconography; painting; print-making; traditional music; dance; and theatre. They fascinate me as much today as when I began; and all periods and styles have their points of interest. In research, I seek out historical and philosophical problems which call for a solution; and am not afraid sometimes to make cross-cultural comparisons. I tend to look for subjects which other scholars have neglected, or have treated inadequately. I moved away from Classical Latin and Greek studies, feeling (incorrectly) that the best topics had all been covered; and I was curious to learn more about the rest of the world, particularly Asia. Oriental studies offered so many unexplored possibilities. However, I recognise that my approach is deeply influenced by my early training as a classicist. The way I translate *tanka* poems comes from long experience in translating Latin and Greek poetry into English, and vice versa.

In studying Japanese art, I draw on a background in museum work, and on my father's occupation as a professional valuer of antiques, rather than on academic art history. I strongly believe in the importance of first-hand knowledge and connoisseurship of objects themselves: art history and theory being second-order endeavours. Similarly, I look at performing arts, such as judo and music, first of all from the point of view of the performer. Throughout my life, musicians have been among my dearest friends; and I am happy that some eminent Canadian musicians are here today: including Victor Feldbrill, Alex Pauk and Alexina Louie. Music remains my first love, though it has always been a part-time activity. However, I have published quite a few papers on music, particularly the history of Japanese music. I am also fortunate to have received considerable training in Western music, particularly on piano and Highland bagpipes; and at the University of Washington I was able to take *koto* lessons with two of the finest living Japanese performers.

I could bore you for hours on any one of these subjects; but I have talked for long enough. I thank you all very much for coming today.



## 追悼文

### 翻訳と追悼

ウオーターハウス教授の「日本と柔道の研究を始めたころ」

Early Studies of Japan and Judo

志々田 文明\*

D. B. ウオーターハウス教授は2017年3月に日英教育研究会の例会（於早稲田大学）で「英国の古典的教育は私をいかにして柔道、日本の音楽、日本の美術に導いたか」の演題で講演なされた。本稿は、同教授が、準備された講演原稿（全38頁）の一つの章である柔道関係の箇所（pp. 18-23）を翻訳したものである。末尾に同教授の思い出と、ある雑誌に書いた訃報を附載した。この機会を与えて下さった鈴木慎一先生に謝意を申し上げる。なお、小見出しの題名の一部に Early Studies とあるので「研究を始めたころ」と訳したが、記述は近年にまで及んでおり拙訳の中で今も自信が持てないでいる。

#### 翻訳

この段階 [1956-58] では日本のことは私の生活の中にほとんど入っていなかった。その最後の年に、ビクトリアの作家ディケンズ（1838-1915）がロッソル（Rossall）のオールドボーイであることを発見して私は嬉しくなった。ディケンズは医者としてそして法律家としてのトレーニングの後、横浜に長い間住んでいた。彼は日本の農業の詳細な研究をしており、忠臣蔵の最初の英語バージョンも含む、たくさんの日本古典文学の翻訳をしていた。そして彼は外交官で学者であったサー・アーネスト・サトウ（Sir Ernest Satow, 1843-1929）の生涯を通しての友達であった。

私が初めて日本に関心を持ったのは、私の父母と祖父母が額に納められた浮世絵を家の壁に飾っていたことからだったと思う。私の祖父は1923年の [関東] 大地震の後、短期間日本を訪問していた。またエジプトから日本まで、アジアの多くの場所で様々な経験をして秘話や記念の品を持っていた。彼はその書齋に、ラフカディオ・ハーンによって開かれた作品を含む、アジアについての多くの本を持っていた。それらによって私は、エジプトから中東、インド、中国、そして日本へと着実に東洋の方に関心が動いていた。ジョセフ・コンラッドの小説が東南アジアを非常に墮落したところと評価していたにもかかわらず、私は特に、アマンダ・クワースワミーから、仏教について学ぶことに魅せられた。

第二次世界大戦の間、ヨークシャーに住んでいる我々は、多くのイギリス臣民がビルマやシンガポールで、あるいは日本の収容所キャンプで苦難を受けていたにも関わらず、太平洋戦争についてはドイツでの戦争以上には何も意識しないでした。20世紀の初期、日露戦争における勝利とその時代の美術における日本の評判を通して、日本は英国において好評を博していた。しかしながら、1902年ロンドンで調印され、1923年に公式に終結した日英同盟締結以後、その関係は悪化し始めた。それまでは、多くの日本人は南イングランドを訪問し、日本を称賛する多くの本や評論が英国に登場していた。

\* 早稲田大学教授

私に大きな影響を与えた一冊の本は、数多くの小説と教育的本を書きながら忘れ去られているジョン・フィンモー（John Finnemore, 1863-1915）による学校少年の物語である。「彼の第一学期：スラプトンのスクールの物語」はロツソルと同じタイプの、架空の英国少年の寄宿学校が状景設定あった。新入生の一人は伊藤ナガオと名付けられた日本人である。小柄で親切な彼は、学校のいじめっ子により挑発された。寄宿舎での最初の夜、喧嘩があり、そのいじめっ子は柔術における技によってベッドの上に投げ飛ばされたことにより、その他の少年たちによって驚きと賞賛を受けた。私の持っているその本にあるカラーのイラストレーションは、なんとなく肩車のように見える技を描いている。伊藤はラグビーにおけるスターになり、その学校で1番の人気者になった。

私がこの本を読んだのは13歳の時だった。そしてそれは私の好奇心を引き起こした。私はエリック・ハリソン（E. J. Harrison, 1873-1961）による小さな教訓書を持っていた。彼はジャーナリストとして日本およびブリティッシュ・コロンビアに住んでいた。講道館で練習し、柔道と武術に関する何冊もの本を英語に翻訳して書いていた。私が所蔵するこの本は技についての線画で説明されていた。私はその線画や、そして巴投げやその他の技をかけようとしているハリソンの説明から想像しようとした。私は柔道を見たことはなかった。ヨークシャーではどんなクラブを指導者もほとんどいなかった。最初の機会が訪れたのは1956年、私がケンブリッジ大学の新入生で、その柔道クラブのデモンストレーションに参加した時である。今日ではケンブリッジ大学柔道クラブは、1906年に（柔術クラブとして）設立された、ヨーロッパで最も古い柔道のクラブとして知られている。私はすぐに入会し、そして最初の一年間に足を壊したにもかかわらず、今日に至るまで私はやや柔道に深入りすることになった。

私の柔道の最初の先生は、J. J. クノンシェイル（Knonsheil）である。彼は30年間同クラブのコーチとして非常に愛された。その神秘的な男は、第一次大戦でフランス秘密諜報員だった。監禁状態から逃亡した。ロシア皇帝の前では20人のレスラーを25分間で破りその腕前を示した。彼は柔道を正確に教えた。それは古いスタイルのものだったが、それにもかかわらず、その柔道は非常に良く効いた。一つには、彼は全ての技を身体の左側で教えた。彼は効果的で並外れた返し技を使った。私が左の払釣込み足をするのは彼の影響によるものである。

不幸にしてJ. J. は、私が1年生を終えると亡くなった。彼の跡には阿部謙四郎（1914-86）が就いた。阿部はロンドン柔道ソサエティーによって英国に招待されていた。さらに変わった性格であった阿部先生は、四国出身で京都の武道専門学校で稽古した。彼は柔道だけでなく、剣術、合気道（どちらも六段）を含むその他いくつかの武道において名声を得た。柔道では彼が我々のところに来た時には七段だったが、後に八段に昇段した。そして彼はイギリスで最も高い段ランクの柔道家だった。また彼は有名な木村政彦を試合で破った数少ない人々の一人である。彼の技術は非常に広範で、彼と乱取りをするとその技は全く予測不能だった。

阿部先生は、高い位置に右手を握る、普通と完全に異なった種類の柔道を教えた。私は J. J. の教えと彼の方法とを調和させようとしたので混乱した。戦争の間、彼は満洲の陸軍士官として勤め、その後は京都警察の主任柔道師範になった。日本武徳会における阿部先生の先生たちのように、阿部先生は様々な武道を同じ屋根の下に位置付くすべてとして考えており、徐々に求心道と呼んだ武道に進化させた。それは決して完全に明瞭でない原理を持った曖昧な哲学であった。阿部先生はそのブロークンな英語で我々に「necessary make circle!」と語っている。

1958年の J. J. クノンシェイルの記念行事において、阿部先生は剣術や合気道（西洋世界における最初の先生の一人）を含む様々な武道の技術をやってみせるために多くの形を演武した。ケンブリッジにおける大きな公開演武会だったと思うが、私はややいたずら心で、阿部先生を近づけないことによってではなく、リラックスによって彼の攻撃を避けることで、どのくらい先生に対して立ったままできるかどうかを試そうと決めた。結局先生は私を投げ飛ばした（足技であったと思う）。その後彼は「君は投げるのが難しい」と述べた。それが賛辞だったのか、それとも単に観察の結果を述べたのか、私は今でも分からない。私は先生のサイン入りの三級の証書と共に、阿部柔道クラブのメンバーシップを大切にしている。

ケンブリッジにおける5年間、私はケンブリッジ大学柔道クラブの有力なメンバーであった。私はオックスフォード大学との柔道定期対抗戦に参加することが可能な”補欠選手”の資格を与えられた。私自身の試合では引き分けだったが、チームは勝った。後の祝勝会では阿部先生は大声で歌い出した。しかしながら、その時、クラブはちっぽけな道場に過ぎなかった。その時阿部先生は英国柔道の政治の問題に巻き込まれており、彼自身の組織を立ち上げる過程にあった。それで阿部先生は時々高弟のビル・リーブ三段を、ケンブリッジ大学の道場で先生に代わって教えるために派遣していた。

私はケンブリッジを離れると大英博物館のスタッフになった。そしてロンドン郊外のハムステッドに住み、T. P. レゲット (T. P. Leggett, 1914-2000) によってロンドンの北に設立された「練習殿 (Renshuden)」という柔道クラブで練習を続けた。レゲット氏はカリスマ的な人であり、ロンドンの「武道会」で谷幸雄 (1880-1950) の下で柔道を始めた。彼が1938年に講道館で学ぶために日本に行く前のことである。日本が第二次世界大戦に参戦した時、レゲット氏はしばらくの間巢鴨拘留所でインターンをしていた。しかし彼は看守と柔道の練習をすることができた。1942年にはロンドンの日本大使館の職員と交代して任務を終えた。戦後、レゲット氏は長い間 BBC の日本放送局の責任者として勤務し、最終的に、練習殿の主任柔道指導者の一人、ジョン・ニューマン (John Newman) によって最終的に指導が引き継がれた。

練習殿は競技における価値を真剣に追求するクラブだった。武道会の方は公平に言えばよりレクリエーションなクラブであり、アクセスに便利とは言えないケンジントンに位置していた。練習殿の道場は昔の教会ホール（冬は極端に寒い！）にあった。そして西洋

における現在の多くのクラブと違って、一週間のどの夜もオープンされていた。私がケンブリッジにいた時にはそこで週末にあるコースに参加した。そしてロンドンを離れるときに（それは1964年の終わり）、私は一級だった。主任指導者はジョージ・カー（George Kerr . b. 1937）だった。彼はジョン・ニューマン（1935-93）と一緒に天理大学での厳しい柔道修行から戻ってきたばかりだった。それ以来ジョージは英国柔道界の重鎮になるように活動し続け、オーストリアの金メダリスト・ピーター・サンセンバヒャー（Peter Seinsenbacher）のコーチだった。レゲット氏は加えて日本から二人の五段チャンピオン、松下三郎（現在九段）と渡邊喜三郎（現在八段）を招いて練習場で教えさせた。以来彼らは親友になった。松下と渡邊の柔道は高度に洗練されていて、その威力はほとんど魔法と言えた。

レゲット氏はイギリスにおける柔道の発展に大きな影響を与えた。彼は柔道についてだけでなく、禅仏教、ヨガ、将棋についてもたくさんの本を書いた。彼の父は職業バイオリンのバイオリニストで、ほかならぬ老ロッセリアンであるサー・トーマス・ビーチャム（Sir Thomas Beecham）の下で、数年間コヴェント・ガーデンのオーケストラのリーダーだった。私はトレヴァー氏は彼の青年時代に古典ピアニストだったと言われたことがある。私が最初にトレヴァー氏と出会ったのは、学部生の時に彼が仏教の講演にケンブリッジに来た時だった。柔道であるにせよ、仏教あるいはその他の主題であるにせよ、彼はその晩年まで見事な演説をする人だった。彼は嘉納治五郎を知っており、いつも「嘉納博士」（博士は間違いだが）と述べていた。私が練習殿に入会した時、彼はまだ道場で稽古していた。私は彼の必殺の大車を体験することができた。彼の長い足と身長は、その技には好都合だった。多くの長身な人がそうであるように、彼には屈む傾向があった。そして後に彼は盲人になり、さらに姿勢を屈曲させ、あるとき彼は、「剛の形」（1930年後半における講道館で見られた形）における技の一つを私に示範しようと懸命に彼の足を運んでいた。その剛の形はやや復活してきているが、私が最初にその形について彼に尋ねたときには、誰でもその形を知る人がいないようだった。

1964年の最後に、私は英国を離れてシアトルのワシントン大学に行った。その後はカナダのオークビルに居を構えるに至るまでは真剣に柔道を再開することが出来なかった。私はカナダで初段をとった。何年か経ち、カナダの柔道と講道館の両方で四段に昇段した。私は柔道とその関係書そして特に日本に関する本を大きな私設の図書館に蓄積してきた。私は柔道の歴史に関するかなりの論考を公刊し、また文化及び技術史的な本を書くための基盤を作ってきた。日本の柔道の大家や先生方から長年にわたって友情とアドバイスを受けてきたことをとても大切にしている。2016年夏、講道館の月刊『柔道』誌のある記事の主人公として私が大きく紹介された。早稲田大学の志々田文明教授によるものだ。何十年前も前、柔道場の畳の上に私が第一歩を記したときには、そのような記事が現れるとは夢にも思わなかったことであった。

## 1. ウォーターハウス先生の思い出

2012年9月、私はウォーターハウス先生からの初の便り（返信）を受けとった。トロント大学に訪問学者として短期滞在するためのサポートをお願いしたことに対する返信であった。2014年秋、私は氏の努力によって同大学の Massey College という寮と高層ビルの学生寄宿舎の最上階近くに二ヶ月半の間快適な宿をもつことができた。トロントには信頼する富木合気道の旧友が二人おり、適度に知人と交流しながらの快適な研究生生活を夢見ていた。うまくいかないもので、先生とこの二人の家とは、トロント大学から全く異なった三方向の遠方にあり、電車やバスで行く手段もなかった。しかも9月でも寒さは厳しく、都合で単身の訪問であったため、トロント生活は決して楽しいものではなかった。そんな中で先生と出会った場面はいつも光り輝いていたように思い出される。最初のランチは私が招待した楽しいもので、柔道談義に花を咲かせた。日系文化会館の合気道講習へ連れて行ってくれたことが縁となって市田嘉彦先生、小幡宰先生と知り合い、同会館で合気会の師範の稽古を見学したり、富木謙治先生の合気道を紹介する機会も得、見聞を広めることもできた。先生は地元柔道高段者による形（柔の形と講道館護身術）の研究会（早朝から半日）にも連れて行って下さった。参加者の熱意と技量を知ることができ刺激的だった。この講習会では参加した指導者全員が模範演武者の技量に採点しコメントするのだが、先生はいつも考え込んで発言はなされなかった。歴史については蕩々と言葉を紡ぐが技については謙虚だった。私はこれを研究者の姿勢と理解し感じ入るものがあった。一日、ご自宅に招かれ、先生の図書室を拝見し、高名な版画家の松原直子夫人を交えてレストランで晚餐に与った。

2017年3月、先生夫妻が訪日するというので、講道館柔道発祥の地・永昌寺、千葉県嘉納治五郎の墓、講道館と盛りだくさんの計画を立てて再会を待った。しかし長旅の疲れや前年の大病のためであろう、ホテル近くの国会国立博物館での昼食で終えることになったのは残念だった。それでも早稲田大学名誉教授・鈴木慎一先生（恩師・富木謙治先生の同僚）のご配慮により、日英教育研究会での先生の講演会がご夫妻や同友人の参加で行われたのは何よりであった。2012年に始まる先生とのメール交換の記録は20頁に及ぶ。出会い初期の頃に頂いた質問、「心技体」の語源の回答はまだ終わっていない。しばらく天国でお待ち頂いた後に、このことも含めて本格的な柔道談義、武道談義をしたいと思います。心からご冥福をお祈りしたい。

さて、以下の訃報は、ウォーターハウス先生没後にある武道雑誌の知人に届けた原稿である。残念ながら返信はなかったが、それが先生の玉稿を翻訳する契機となり、今回の掲載の機会を得た。塞翁が馬というべきだろう。

## 2. 訃報（デイビッド・ボイヤー・ウォーターハウス氏）

2017年11月16日逝去。柔道オンタリオ黒帯審査委員会書記。1936年英国に生まれケンブリッジ大学キングスカレッジに学ぶ。大英博物館東洋人古代遺物部門勤務を経て1970年ト

ロント大学東アジア部門教授。東洋思想、絵画、音楽等に造詣が深く、浮世絵の鈴木春信研究の権威。柔道の業績としては、「嘉納治五郎と柔道運動の始まり」（第5回体育スポーツ史カナダシンポジウム、1982）、「講道館図書資料室」（柔道オンタリオニュースレター、1988）、「柔道の価値：単なるスポーツではない」（日本の声、1990）。晩年柔道の大著を書く構想を懐いていたが未完に終わった。海外の著名な柔道史研究者をサポートし影響を与えた。講道館柔道四段。行年 81 歳。

## デイヴィッド ウォーターハウス先生を悼む

平澤信康\*

2017年3月18日に開催した日英教育研究会の研究茶話会にお招きして高話を伺ったトロント大学名誉教授 David Boyer Waterhouse 先生の訃報に接したのは、同年11月17日深夜のことでした。まさに「巨星、墜つ」の感を受けました。偶然2009年に学縁をえた筆者にとって、早稲田大学での研究会が先生の鳳声を聴きえた最後の機会となってしまいました。

来日に同行された日本人の奥様から、先生が癌との闘病生活を過ごしてこられ、奇跡的に回復して来日を果たされたことを知らされた筆者にとっては、ご帰国後の健康状態が気がかりでした。筆まめで几帳面に電子メールで応答してくださった先生から、夏以降、音沙汰がなくなりました。もしや、と案じておりましたが、不安が的中してしまいました。

昨春の研究会では、碩学らしい顔貌を拝見でき、張りのある声を拝聴することができました。トロントにおける優れた医療と、御家族の献身的な看護と、柔道を通して培われた気力・体力と強い意思による回復力の賜物であったのでしょうか。お元気な様子に、さすがと感嘆しておりましたが、8か月後には帰らぬ人となって旅立たれ、そうした耐久力にも限界があることを思い知らされました。

先生は、イギリス出身のカナダ人学者でした。英国イングランド北東部ヨークシャーの端にある温泉町ハロゲイトに、1936年7月13日に生まれました。母方の祖父はロンドン子で、有名な画家ターナーの傍系親族の子孫であるとのこと。

イングランド北西部にある寄宿制進学校に学び、給費生として古典語（ラテン語とギリシャ語）を専攻。卒業後、1956年にケンブリッジ大学に進学し、さらに大学院へ進み、奨学生として5年間キングスカレッジに在籍して古典語と道徳科学（哲学）および東洋研究（日本と中国）を専攻しました。

1961年から3年間、大英博物館の東洋古美術部に学芸員補佐として勤務しつつ、同館の優れた学芸員から多くを学び、1963年に修士号を取得しました。1964年、アジアの音楽と民族音楽学への知的関心を追求したいとの志から、米国太平洋岸のシアトルにあるワシントン大学にアジア美術センター研究員として勤務しました。就職先を北米大陸に見出した

\* 上武大学教授 鹿屋体育大学名誉教授

先生は、1966年にカナダの名門トロント大学の東アジア研究学部に招かれ、以来2006年までの長きにわたり同大学で教鞭を執られました。1975年から正教授となり、人文学の教授として同大学のセント・ジョージキャンパスにおいて、日本の音楽、芸能、宗教、武術など幅広い科目を担当され、2002年に定年退職した後も2006年まで引き続き日本語の古文・漢文を教えながら、日本の古典作品に親しんでおられました。

この間、1966年から王立オンタリオ美術館の極東部門の名誉研究員を務め、ROMが所蔵する日本美術品への助言を行いました（同館は当時、世界最大の大学美術館）。1975年にROMから *Images of Eighteenth Century Japan: Ukiyoe Prints from the Sir Edmund Walker Collection* が出版されています。1990年に権威あるカナダ王立協会の会員に選出された他、王立アジア協会やアメリカ浮世絵学会などの会員でもおられました。

研究業績として、日本美術（主に浮世絵）に関する著書8冊、多数の編著、180以上の論文や論説を発表してこられました。それらのテーマは、日本と東アジアの美術、舞踊、音楽理論、仏教、仏教美術などに関するものです。とくに、インドから日本への仏教美術の伝来、日本の絵画と版画、20世紀アジア美術、アジアにおける音楽と舞踊の歴史、アジアの武術史（特に柔道）、音楽・美術・宗教の認識論に学問的関心を寄せておられました。

このように先生の研究の守備範囲は極めて広いものがありましたが、なかでも先生は浮世絵師・鈴木晴信（1725?～70）の専門家として知られており、主著である以下の解説付きカタログには心血を注いだようです。同書の装幀には、ハーバード大学のデザインスクールを終了してニューヨークで活躍しているデザイナーのご長男が関与・貢献した由です。

*The Harunobu Decade: A Catalogue of Woodcuts by Suzuki Harunobu and His Followers in the Museum of Fine Arts Boston, Hotei Publishing in Leiden, 2013*

和歌を初め日本の古典文学への深い造詣をもとに、見立絵の優れた解釈を示しています。こうした先生の日本文化理解と日加関係の深化への貢献が認められ、2016年5月に在トロント日本国総領事から表彰され、翌2017年には春の叙勲で先生に旭日中綬賞が授与されることが報じられました。6月29日に在トロント日本総領事館で中山泰則総領事主催の叙勲伝達式が行われ、御家族や縁故のある方々が参集して祝賀会が催されたようです。その後、病状が悪化していったようですが、朗報が御逝去の前であったことは幸いです。

早稲田大学国際会議場4階共同研究室での先生の講演タイトルは、HOW A CLASSICAL EDUCATION IN ENGLAND LED ME TO JUDO, JAPANESE MUSIC AND JAPANESE ART でした。古典研究に打ち込む日々を過ごすなかで、どのように日本文化に出会い、柔道や近世美術に関心を寄せるようになり、なぜ日本研究を志すに至ったのか、大学教授に至るまでの若き日々を（ケンブリッジ大学キングスカレッジでの被教育体験を含め）振り返って解説していただきました。一研究者の自伝的回顧ですが、同時にイギリス教育史の優れた解説でもある内容の御発表でした。英国の中等教育や高等教育の歴史を学ぼうとする者にとって優れた資料となりえていますので、詳しくは Occasional paper を御覧ください。

筆者の前任校・鹿屋体育大学へ武道研究会の講師として2009年5月にお招きし、同年秋

に筆者がトロントを訪問した際には大学等を案内していただきました。日英教育研究会にお招きしたのが3回目の直接交流でしたが、以後、拝眉の機会は永遠に失われてしまいました。講演に先んじた昼食の前に、大隈庭園のそばにいた野良猫を認めて目を細めておられたことも思い浮かびます。緻密な学殖と高邁な学究的精神に加え素朴なチャーミングさを兼ね具えた先生の遺徳を思い出すとき、哀惜・愛惜の念は尽きず、感無量です。合掌！

#### 補遺

ウオーターハウス先生がおなくなりになられてから長い時が流れました。奥様から訃報をいただいて、関係者に知らせ、少し落ち着いてから「ニューズレター」で先生の追悼号を編もうと思ひ立ち、編集会議に諮り、原稿を依頼し、長い時を費やして漸く本号を出来させることができました。追悼号を独立した冊子として編集することができなかつたために、必ずしも迅速に追悼号を皆様の手にお届けできなかつたことを遺憾に思います。

追悼記事にあるウオーターハウス先生の講演を特集する Occasional Paper の編集については、目下作業を続けております。

さるご講演当日、私は先生ご夫妻とご案内くださった平澤信康さんを早稲田大学正門前にお迎えしたのです。会津八一記念館をご案内いたしました、どこかお疲れのように拝見しましたので演劇博物館へお誘いすることを中断して、お昼をお過ごしいただいたのです。今になってみると其の頃先生は病と闘っておいでだったのです。昼食を楽しんでくださって、ワインを愛でておられた先生のご様子からは、そのことを察することができませんでした。早稲田大学での講演を終えて帰国され、先生は原稿とご自分の履歴書をお書きになられました。奥様からは、先生の病状がよくなり一進一退の中、原稿の推敲に努力しておられるご様子を知らせていただいております。先生は当初の語数では不足するので、語数を増やしてもよいかというお問い合わせもいただいております。原稿と履歴書と原稿に沿える見出しをお揃えくださっておられました。

たまたま、Occasional Paper を私どもが編集することを知られた御子息が、デザイナーとして関心を持たれた由、奥様から伺いましたので、私は編集委員会にそのことを伝えると同時に、奥様を経てご子息に私どもの会の規模を知らせ、デザイン料をお支払いできない旨説明しながらデザインをしてくださるかどうかを打診しました。お答えを待つうちに時が流れ先生のご病状は危篤状況になりました。ご子息にもデザインの時が失われました。上記諸原稿（ウオーターハウス先生ご遺稿）はご子息から私へ送られてまいりました。

ほどなく出来る Occasional Paper は、その様な次第でわたくしども編集委員会が選択する様式で作られております。先生がお元気でいらっしゃるときに間に合わなかつたことは、きわめてゆき届かない仕儀で、編集にあつた者の一人として遺憾に存じます。

以上のような経緯の中、始終、平澤信康教授は講演会の運営と諸編集の折々に助言と協力を惜しまれずお力添えくださいました。末になりましたが、記してお礼といたします。

鈴木慎一



### III 会員投稿

#### 教育実践・教育学研究における人権法の役割

— 児童の権利条約第 4・5 回政府報告審査の年に寄せて —

佐々木 亮\*

今年 2 月、スイスのジュネーヴにある国連欧州本部にて、日本における児童（子ども）の権利条約の実施状況に関する審査が行われた。これは、国連の下で採択された人権条約の締約国が、国内実施状況に関する報告書を提出し、条約ごとに設置された委員会が報告内容を審査し、コメント（総括所見）を公表する手続である。このやり取りを条約が定める周期（子どもの権利条約では 5 年ごと）で繰り返し、政府報告書と委員会の総括所見を公開することによって<sup>iii</sup>、各国における人権条約の実施を図っている。さらに、政府報告とは別に、自国が抱える人権問題を訴えるレポートを提出する方法で、NGO もこの手続に参加している。子どもの権利条約に関しては、1994 年の批准以後、3 回の審査を受け、今回は第 4・5 回目の審査（第 4 回政府報告が提出されなかったため、今回は第 4・5 回分を一括で審査することになった）となった。子どもの権利擁護の分野で活動する国内の NGO も、活発にレポートを提出している。それらは近いうちに書籍等によって公開・市販されることが期待される。本稿では、これに寄せて、筆者の専門とする国際人権法の立場から、教育実践ないし教育活動における人権の役割について、私権を述べることにしたい(1)。

教育行政学者の森隆夫は、教育行政に求められる 2 つの視角として、法的思考（リーガル・マインド）と教育的思考（エデュケーショナル・マインド）を提唱する(2)。法的思考は、一般的な適用可能性と具体的妥当性を追求する思考様式である。たとえば、専門家でなければ一読して意味を理解できないほど、法律の条文が複雑な構文をなすのは、法律があらゆる場面で公平に適用されることと、具体的な場面に臨機応変に対応できることの双方を目指した結果である。法的思考とは、客観性や公平性を目指して作られた法を使いこなす技術的理性である。これに対して、教育的思考とは、教育の主体（多くの場合は子ども）が現在置かれた状況と将来の発達可能性を考えて、人格の完成に向かっていく思考様式である。これは、時に自己犠牲や奉仕を伴うものであり、本質的には、親の子に対する自然的愛だといえる。児童生徒に接する教師の教育的思考も、これに類するものであるが、親と教師に全く同じものを要求することが現実的でない以上、ある種の技術的愛だといえる。森の指摘によれば、教育行政は法律・法的思考に基づかなければならないが、そこにある裁量の中では、教育的思考が発揮されるべきである(3)。

日本も締約国となっている人権条約のほか、日本国憲法にも、教育はそれ自体として人権であると明記されている。さらに、基本的人権の尊重が、日本国憲法を貫く原

\* 島根大学特任准教授

則の1つである点に鑑みれば、憲法や教育基本法を基礎として行われる公教育もまた、人権の尊重を基本原理としなければならない。すなわち、人権原理に支えられた法的思考を前提としつつ、その枠組の下で行われる教育活動は、大いに教育的思考に基づくことが期待される。

今回の子どもの権利条約の履行審査において、委員会にレポートを提出したNGOの多くが、学校における人権侵害に関心を持っていたようである。従来から問題視されていた体罰や暴力的な指導に加えて、いわゆる「ブラック校則」や「ブラック部活」と呼ばれる合理的根拠のない校則（たとえば、特定の髪型の強制、極端な例では下着の色の指定・検査）や過度の長時間の部活動、さらには、運動会における7～10段の人間ピラミッドや体育において必修化された柔剣道や銃剣道のように、高い危険性と不十分な安全確保の下で行われる学校行事等に強い懸念が向けられている。大きな問題は、これらが人権侵害ないし違法であるにもかかわらず、「感動」や「一体感」、「指導」や教え子への「愛情」によって美談化され、これらの活動に伴う危険性や暴力性が無視されていることにある(4)。さらに、指導中に児童生徒を殴る、暴言を浴びせるといった体罰を、そもそも違法であるにもかかわらず、情熱を持って教育に取り組んだ結果行き過ぎたものとして、正当化する意見もいまだに受け入れられている。先に述べた通り、公教育は憲法や教育基本法を基礎として展開されるものである。教師の教育的思考もまた、そうした枠組の中で発揮されなければならない、(仮に善意に基づいていたとしても)「愛情」や「指導」という言葉によって、暴力や人権侵害を正当化することが許されてはならない。

近代人権思想は、人間一人ひとりを平等な「個人」として、その尊厳と自由を尊重した扱いを要求する(5)。現代日本の教育制度もこれを前提に成り立ち、それが国民の総意である一方で、フランス革命に象徴される18世紀西欧由来の価値観であることもまた事実である。子どもの権利条約が日本の教育に提起するものは、経済社会の面での近代化を実現した国が、より日常的な人間関係や個人の価値観の面でも近代化し得るかどうかという問題であるように思われる。

註

(1) 条約ごとに、全締約国政府が提出した報告書、および、委員会の総括所見は、国連人権高等弁務官事務所(UNOHCHR)のウェブサイト閲覧可能である。(主として英語とフランス語 <http://www.ohchr.org/EN/HRBodies/Pages/HumanRightsBodies.aspx>、または日本に関するもの

の

(2) 森隆夫『教育行政における法的思考と教育的思考』上巻、教育開発研究所、1991、29頁以下。

(3) 上掲所書、35頁。

(4) 内田良『教育という病—子どもと先生を苦しめる「教育リスク」』光文社新書、2015

(5) 樋口陽一『憲法という作為—「人」と「市民」の連関と緊張』岩波書店、2009、107頁以下。

## IV 教育情報

本棚：『日本の15歳はなぜ学力が高いのか：5つの教育大国に学ぶ成功の秘密』

ルーシー・クレハン著、橋川 史訳 (2017) 早川書房

原著：CLEVERLANDS: The Secrets behind the World's Education Superpowers by Lucy Crehan .

First publication 2016; paperback edition, 2018

大和 洋子\*

PISA の影響力は様々なところで出てきているようだ。何しろ各国の子どもたちの学力を比較してしまうのだから。その目的は、「義務教育修了段階での知識や技能を実生活の様々な場面で直面する課題にどの程度活用できるかを測る」(文科省ホームページ) ことにあり、決して国による学力のランク付けではないのだが、第1回目の2000年実施以来、PISAの結果は国の教育関係者に安堵やショックを与え、マスコミの恰好のトピックとなっている。「PISAのランキング上位国＝教育が高い国」という認識は広く認められているようだ。

自閉症の教育に1年間関わり、その後教育困難校に赴任し、そこでの3年間、日々の学校教育に精神的にも体力的にも疲労困憊した経験を持つ元英国人教師が、2年間にわたるPISA上位国5か国での教育体験を経て記した体験記が本著である。最初の出版はクラウドファンディングで賄っている。この出版物は、メディアや専門家から高い評価を得、2017年に邦訳も出版された(解説は荻谷剛彦オックスフォード大学教授)。そして、この4月にペーパーバック版としてUNBOUNDから改めて出版されるに至ったという書籍である。

PISAの結果の分析や統計は、OECDから数あまた出版されている。しかし、著者は文書になっているデータや分析を読みながら、教育が全体としてどのように機能しているかは、自分の目で見なくてはわからないと、PISA上位国の教育を観察する旅に出かけた。日本では、大学や院を卒業・修了したら、そのまま就職しないと人生設計のベルトコンベアーに乗りそびれてしまう感があるが、著者は、修士課程を修了後に、2年間のギャップ・イヤーを取っている。ギャップ・イヤーという選択肢もありうることに、イギリスを始めとする欧米圏の余裕を感じるが、著者のそのギャップ・イヤーの計画がまた壮大だ。まず、独自の基準で訪問先の5か国(フィンランド、シンガポール、日本、中国(上海)、カナダ)を選んだ。この中に日本が入っているのは「小さな都市国家ではなく、大きな国」だからである。日本人自身には、日本は小さな島国という認識はないだろうか。フィンランドは、最近まで東アジアを凌いでいた唯一の西欧の国だから、カナダは、文化的、地理的多様性に関わらず上位に入っているからという理由である。

著者の行動力にはただただ脱帽する。メールで滞在目的国の学校の教員(その段階で見知らぬ赤の他人)にメールを送り、訪問依頼をする。そして教員の自宅に泊めてもらいつつ、一か国に最低4週間は滞在する。3週間は学校の手伝いをしながら(英国人なので、英

\* 青山学院大学非常勤講師

語を教えるという強力な武器がある)、自分が感じたこと、思ったこと、不思議に思ったことを、丁寧に記録する。記録する対象は、学校の中だけでなく普段の生活で接する全ての人に及んでいるので、まさに社会・教育界全体を鳥瞰的に観察している。日々の記録までなら誰にでもできようが、著者は、自分の感じた「なぜ？」の答えを見つけるべく、研究文献を渉猟し、きちんと研究的裏付けをとっているため、内容は論文そのものである。しかし、旅行・体験記らしく、アネクドットをあちこちに挟んでいるので、肩肘張らずに楽しく読みすすめられるのは有り難い。

比較教育学のフィールドワークでは、中・長期的に調査対象国に滞在して参与観察する手法が用いられるが、著者の手法がまさにそれに当たる。滞在先はいわゆるエリート校や模範的な学校、実験的試みをしている最先端校ではなく、ごく一般的と思われる学校だ。実はその環境を得るために、正式なルートではなく、前述した型破りな手法で訪問先を探している。しかも、学校関係者が自分に慣れて普通通りの生活ができるように、最初の一週間は、ただその学校に通うことから始めている。学校教育に関わりながら、生徒や先生だけでなく、日常生活で出会った人々と交流する中で観察を続け、最終的に自身の英国での教師としての視点を持って、文章を紡いでいる。

一般的に、東アジア（特に中国）の教育は暗記中心で生徒の活動が少ない、という思い込みがないだろうか。英国人元教師の目から見ると必ずしもそうではない（研究文献あり）。日本で盛んな「アクティブ・ラーニング」は、これまでの日本の学校での学びはアクティブではないという前提のもとに導入されているが、果たしてそうなのか。私たちが常識と思いこんでいることが、視点を変えるとそうではないといった、目から鱗の発見や感想があちこちにちりばめられており、日ごろ見慣れた自国の教育を、大局観で観察する重要性に気づかされる。将来子どもができて、自分の子どもに教育を授ける国を選べるとしたら、5か国の中からどこを選ぶか、その答えと理由が述べられている。残念ながらそれは日本ではない。著者には、日本は、よくも悪くも「みな同じことが尊ばれる国」と映る。最後に国土面積、文化、多様性、歴史など様々な点で異なる5か国の参与観察及び文献研究を通して得られた知見から、教育政策提言を行っている。政策立案者には必見であろう。何より本著の質を高いものにしてているのが豊富な参考文献である。文献リストだけでも相当使える。疲れた頭にもスーッと入ってくる構成でありながら、研究論文としての価値がある、最近一番のお勧めの書籍である。

## V 記 録

### (1) 2018年定期総会の記録(総会議事録抄)

早稲田奉仕園スコットホール2F222号室を会場として、2018年5月26日午前10時半から12時まで総会が開かれた。望月議長から過去三年を振り返る挨拶があったのち、森川澄男会員が総会議長に選ばれ、報告事項協議事項の順に議事が進められた。以下、主なものを掲げる。

- 1 : 2017 年度予算決算報告 : 配布資料 2 に沿う 2017 年度予算とその執行経過について鈴木幹事から説明があり、日暮トモ子幹事による監査報告が代読されて決算案を承認。
- 2 : 2018 年度役員人事案 : 2018 年度役について原案が承認された。合わせて、2018 年度以降の幹事会の在り方に関する提案が承認された。その後、望月重信幹事を議長に選出し、村山拓幹事を事務局長、日暮トモ子会員を監査に選任した。

幹事 (五十音順)

浅香玲子・生田清人・石井由理・上杉孝實・江間史明・小野由美子・木村治生・  
斎藤新治・杉山治寛・鈴木慎一・醍醐路子・鶴田洋子・土橋真里・平沢信康・  
望月重信・森川澄男・村山拓・大和洋子

- 3、2018 年度活動計画について事務局から提案され、協議の後承認された。主要内容は以下の通り

- (1) 研究交流活動の促進、(2) ニュースレター及び日英教育誌の発行、  
(3) その他本研究会の目的にふさわしい事業。

- 4、幹事会の開催運営に関する申し合わせ

遠隔地に住む方々、勤務上の諸条件により、常時、開催される幹事会に出席が難しい方々の事情を勘案して、幹事会を、(i) 定期総会前後に開催する幹事会を幹事全体会とし、(ii) 研究茶話会、編集委員会、事務局会議等の機会に開催される幹事会には自由参加とする。

## VI Abstracts

### *Messages from the Chair*

#### **Beyond the Rise and Fall of Sociology of Education in the 1970s**

Chair, Mochizuki Shigenobu\*

Three years have passed as chair of the JUKERF and being nominated Chairperson of the JUKERF for the next three years to come, I must say *THANK YOU* for helping my work to go successfully. As a sociologist of education I was interested in the emergence of the 'new sociology of education' in the 1970s and 1980s. It provided a way of critiquing the curriculum by not just focusing on simple educational issues but by making a critique of society as a whole. But why did the new sociology of education have such a short life? Because it lacked a political analysis of the role of academic work in education. In other words it was as if for university-based educational studies, to critique was enough and it was the responsibility of others to take up the practical side of the questions raised by academic research. Young (M.F.D.) pointed out that in the 1980s Teacher Education Policy in the UK could be seen in terms of the shift from evolutionary to technocratic modernization. This makes the system more efficient and cost effective. The uncritical belief in the

line between science and progress became no longer adequate. Since the late 1980s, technical modernization has been part of the neo-liberal project of Conservative Governments throughout the world. We should be aware of the shift from a professional model to an institutional model since we are now obliged to choose from these two alternatives.

\* Professor Emeritus, Meijigakuin University (Tokyo)

*Forum on 11<sup>th</sup> November, 2017*

### **Reviewing Prof. Sakuma's Presentation**

Mari Kunieda\*

Prof. Sakuma's presentation on teacher training in nineteenth century America focused on historical aspects of the teaching profession for women. Seven nineteenth century female teachers were discussed; three in the early part of the century; one in the mid part; and three in the latter part; representing different models of female teachers of the time. Reviewing this issue from a viewpoint of gender, we can see that women's educational opportunities, not only in primary education but also in secondary education, advanced extensively. The teacher training system turned in favor of women, and helped women pursue more education and more economic power. The nineteenth century was the period when many Western countries developed primary educational system for people, and R.P. Dore called those Western countries "forerunners." Countries like Japan, called "late starters," developed their modern educational systems with reference to the forerunners' experiences. Japan invited Prof. D. Murray from the United States as an advisor. He did not force Japan to model its system after the American case but rather respected Japan's historical and cultural background. Still, we have to accept the fact that the nineteenth century U.S. experiences of teacher education were reflected in Japan.

\*Professor Emeritus, Tsuda Women's College

*Forum on 16<sup>th</sup> December 2017*

### **Academic Work of *Crisis in Education*, as an Editor and Translator**

Tendo Mutsuko\*

Calogiannakis, P., Karras, K. G. , Wolhuter, C. , Chiang, T-H., M. Tendo eds. 2014, *Crisis in Education: Modern Trends and Issues*, Nicosia, Cyprus: HM Studies and Publishing. (Japanese version, *Kyoiku no Kiki*, Translated by Tendo Mutsuko, et.al., 2017, Tokyo: Toyokan publishing.) Tendo Mutsuko, one of the editors of English version, *Crisis in Education*, and the editor and leading translator of Japanese version *Kyoiku no Kiki*, summarizes the purpose of this volume, especially focuses on globalization, critical pedagogy and the future of education. This collective

volume, *Crisis in Education*, brings together a selection of writings by distinguished scholars of education, sociology of education, and comparative education around the world. This volume consists of 16 chapters, with two parts. One chapter outlines the societal changes taking place, the context which forces a re-thinking of education. Other chapters deal with the reconciling of diversity with common interests, globalization, neo-liberalism, and political effects to educational policies. A number of chapters look at the university, in Europe, East Asia, and in Africa. In chapter one, "Educational crises and the Tasks of the critical Scholar/Activist", M. W. Apple, from a perspective of critical pedagogy, argued that neoliberal and conservative policies have effects on schools, and on all school staff, under the influence of those who wield power in education. He raised the keyword, "conservative modernization". A. Kazamias (Chapter 3), from a standpoint of comparative education, pointed to the 'Paideia Crisis', and argues that we need to re-conceptualize Neo-humanistic paideia, in the dehumanized globalized New World. R. Cowen (Chapter 6) discusses the university, the public good and translogies. He questioned the notion of TINA (There is no Alternative?). Japanese contributors, Onai Toru (sociologist) focuses on New Comers and Education in Japan. Tendo Mutsuko discusses the role of the family and parenthood in education based on B. Bernstein's theory. In these crucial times, this collection of powerful essays can serve to stimulate academic discussion and investigation for the future of the next generation.

\* Professor, Miyagi Gakuin Women's University, Japan

### **Crisis in Education: a book questioned**

**Yuri Nakajima\***

On 16<sup>th</sup> December in 2017, there was held a Forum at Waseda University. It was a *Conversazione*, where the editor and some of the translators met together and talked to the audience for what the book was edited and how it was translated into Japanese. I joined and made a short remark upon my chapter written by Popkewitz and others. The debates covered various topics such as bureaucratization, alleviation and marketization of education at large. Comments and arguments converged naturally to the main theme of the book; *Crisis in Education*. It seemed urgent for those concerned with education to look after alternatives for securing genuine learning and education. Communication shared by all those attended suggested if it was high time for anyone to address outwardly their personal sentiments which loomed around their respective indignant concerns if not wrath with educational reform. In the Japanese universities here and there sound the voices of innovations and reforms. Their echoes sound loud but dispersing. I think that any reforms should be bright in origin but nowadays university staffs from clerical to professional are up to the elbow with works that are not bright but twilight. It is because at least in Japan there have been planned nothing about universities toward the long future but merely day to day trifles have been put on the

tables called “university reforms”. Such routines with which we are acquainted should be redeemed without critical reflections? After hearing more inner voices of the participants, I chewed on the question in mind on my way back home from the Forum and pleasant dinner.

\*teacher, University of Nagasaki

### ***Obituary for the Late Professor David Waterhouse***

#### **An Obituary for the late Professor Waterhouse**

Shishida Humiaki \*

In this obituary, I will briefly introduce the late Professor Waterhouse as a Judo Player with some of my personal memories of collaborating with him. One day in March 2017, at Waseda University, he gave a lecture on English traditional education by which he was led to Japanese fine arts, music and Judo. Some passages included in this obituary are from the translation by me of his lecture on his early days when he was guided to Judo. He remarked about a book in which he read a story of a Japanese boy who flung down a bully by using Judo techniques. The story inspired him to take up Judo. He joined a Judo club at London where he met a famous Shihan named Kenshiro Abe. Leaving the Judo Club at Cambridge University, he worked at London for some time where he met Saburo Yamashita and Kisaburo Watanabe. He happily shared in their marvelous Judo performances. I concluded my obituary for him with a short note on his days in Washington and Canada.

\*Professor, Waseda University

#### **Mourning over Professor Waterhouse’s death**

Nobuyasu Hirasawa\*

Prof. David Boyer Waterhouse (1936-2017), who was a Professor Emeritus of the University of Toronto, Canada, passed away on November 2017. It has been eight months since he gave us a talk about educational and academic life history at our study meeting of the Japan-UK Education Research Forum held in Waseda University. I met him in Kagoshima, Toronto and Tokyo. This third time was eventually the last chance for me to hear his real voice. The title of his autobiographical talk was ‘HOW A CLASSICAL EDUCATION IN ENGLAND LED ME TO JUDO, JAPANESE MUSIC AND JAPANESE ART’. He was born and grew up in the Yorkshire spa town of Harrogate. He was a pupil in the north of England at a leading private boarding school, Rossall School for boys, from 1949 to 1953. After his two years of National Service in the Royal Air Force, he studied at King’s College, University of Cambridge, from 1956 to 1961. His three majors were Classics, Moral Science and Oriental Studies (Japan and China). During his five years at Cambridge he was an active member of Cambridge University Judo Club. On leaving Cambridge he joined the staff of the British Museum. In September 1961 he was appointed as an Assistant Keeper in the



Department of Oriental Antiquities. He was on the staff of the Museum for three years, and wrote his first book there on Suzuki Harunobu (1725?~70) and the development of *nishiki-e*. At the end of 1964 he left England for the University of Washington in Seattle, when he was thinking of switching to ethnomusicology. In 1965-6, he stayed as a Research Fellow at the University of Washington. His subsequent teaching and research career was at the University of Toronto, from 1966 to 2006. He was Professor of the Department of East Asian Studies, University of Toronto, from 1975 to 2002. His academic interests were very wide - Indian dance and music, history of Buddhism, music in ancient Japan, arts of Buddhism in Japan, martial arts etc. Especially he was a specialist of *Ukiyo-e*. He was a judoka and also a good player of the piano and the Highland bagpipes. On June 29 2017, Consul-General of Japan Yasunori Nakayama hosted a conferment ceremony for Prof. David Waterhouse, who had been awarded the Order of the Rising Sun, Gold Rays with Neck Ribbon, for his contributions to Japanese studies and for promoting understanding of Japanese culture among Canadians. He was awarded his decoration for his academic accomplishments as a leading scholar on ukiyo-e, including the work of Suzuki Harunobu, for his contributions toward spreading appreciation of Japanese aesthetics in Canada, and for promoting understanding of Japanese culture through judo. To my great sorrow, the news on his death reached me. I was struck with a strong impression that a great star has fallen.

\*Nobuyasu HIRASAWA, professor of Jobu University, professor emeritus of National Institute of Fitness and Sports in Kanoya

### *Article*

#### **The Significance of Human Rights Consideration in Educational Practice And Research-- Inspired by the Periodic Review on the Japan's State Report at the Committee on the Rights of the Child in 2018 -**

Sasaki Ryo\*

This essay aims to consider how and why human rights are/shall be essential in research and practice of education. It is inspired by Japan's periodic review of the United Nations Committee on the Rights of the Child held in Geneva in February 2018. Some NGOs as well as the Committee and the State authorities are involved in submitting other reports than the States (so-called 'counter' or 'alternative reports'). In this time, reports submitted by Japanese NGOs, some of which will be published shortly' are expected to mention school issues such as 'black school rules', those with significantly unreasonable contents and 'black club activities', extra-curricular activities too long or heavy, etc. A serious concern in Japan is that such kinds of violation tend to be permitted as a part of educational practice. The author, basing his argument on a classification of legal and educational minds by a scholar of educational administration,

Takao Mori, claims that a consideration of human rights, as the basis of the legal mind in a modern democratic society, should be consistently the basis of education, and it is on this basis that the educational mind should operate. Though the thought of human rights is a product of a modern civil society in 18<sup>th</sup>-century Europe, the Constitutional and educational law in Japan recognise its universality as the consensus of the Japanese people. Japan, which has modernised in the economic area, is called into question as whether or not it will also modernise in the realm of values of individuals and human relationship.

*Book Review*

**CLEVERLANDS: The Secrets behind the World's Education Superpowers by Lucy Crehan . First publication 2016; paperback edition, 2018**

**Yoko Yamato\***

The author of the book, Lucy Drehan, decided to travel to five of PISA's top scoring countries to see and experience each country to find the reasons for their success in education. She chose five countries with her own criteria. Finland, being the only European country that remains competitive with Asian countries; Japan as a big country, not a city-state, with educational success; and Canada, for being a multi-cultural country in terms of ethnicity and landscape and yet successful in education. The remaining two are Singapore and Shanghai, China. She has one year's experience in teaching children with autism and three years at middle school in a relatively poor environment in the UK. The observation she made during her stay in each country is reflected with her own experience as a school teacher and the findings are backed up with academic research papers. Her viewpoints often call on the importance of multi-level observation and birds' eye view to reflect our own education system. The book is indeed a good research publication and at the same time, a field report with lots of anecdotic stories which make it easy to read and enjoy.

\*Meijigakuin University, temporary lecturer

## 編集後記

### 2018 年度：これからの日時

新緑の季節を過ぎて紫陽花の季節になり、7月の始まりとともに梅雨が明け、例年にな  
い猛暑に見舞われております。会員の皆様、御元気にお過ごしでいらっしゃいますか。  
本号には 2017 年度の研究茶話会の記録と 2018 年度定期総会議事録の主だったところを掲  
載すると同時に、私どもの会をお訪ねくださって講演して下さったウオーターハウス博  
士を追悼する記事を掲載いたしました。それぞれのお立場で、稿を起こして下さった執  
筆者各位に紙面を借りて心からお礼を申し上げます。ご遺族からは貴重な写真其の他を頂  
戴いたしました。記してお礼とさせていただきます。

新年度が始まって、5月にはケンブリッジ大学の教育をテーマとして山内久明東京大学名  
誉教授からお話を伺う機会を持ち、定期総会時の研究茶話会では南ウエールズ大学名誉教  
授で本研究会会員でもある D.ターナー博士から、英国の教育研究について興味深い話題提  
供がありました。次号にそれらの記事を載せたいと思っております。

本号には本欄、会員投稿と久々に紙面を賑やかにする寄稿がありました。このような  
会員の皆様による試みを歓迎いたします。どなたも積極的に紙面づくりにご参加ください。

今年の前半期には、7月14日に「学校教育に対する親の願い」と題して木村治生会員と  
氏岡真弓朝日新聞編集委員を迎える研究茶話会があり、後期には、12月8～9日に研究総  
会「少数民族の教育」「英国の教育研究」が予定されております。英国から Gary McCulloch  
ロンドン大学教授、David Turner 名誉教授が参加され、中国からは鍾周清華大学准教授、  
袁梅民族大学准教授がおいでになる予定です。ご期待ください。なお、今回は英文アブス  
トラクトの校閲について Robert Aspinall 同志社大学教授（会員）のお手を煩わせました。  
お礼を申し上げます。

去る6月3日、定期総会後の編集委員会が催され、私が引き続き「ニューズレター」編  
集のお世話をすることになりました。私は生田清人副編集長と編集委員各位のお力添えを  
いただきながらよい「ニューズレター」作りに努めます。

会員各位のご支援をお願い致します。

編集委員長 森川澄男